

■座右の銘

私の座右の銘は、と聞かれたら「障害者は特別な人間ではない、その地域に住む、同年代の人と同じ権利をもつ人間だ」と答えます。

1981年の国際障害者年以來、この言葉を運動に生かし、また自身自身の生活にも生かしてきました。日本の、東京の、調布に住む人間として、同じ権利を行使し、地域住民としての義務を果たそうとしてきました。結婚、子育て、団地での生活。右往左往しましたが、なんとかやりました。長男の結婚式や父と母の葬儀を無事に終えたとき、一昔前なら冠婚葬祭から外された障害者ですが、なんとか役目を果たせた自分に対して、この言葉を思い浮かべました。孫が生まれてすごく喜んでいて、この発想からかもしれません。しかし「その地域に住む、同年代の人と同じ権利をもつ」ことも、多くの葛藤があります。団地に引っ越してきた頃、公共の場の掃除が月1回あり、各家から一人ずつ出ることになり、私が出ていきました。すると、長老の人が「お前じゃ役に立たない。奥さんを出しなさい」と言いました。妻は、子育てでつかれはてていました。他の人が「いいんだよ、一生懸命やれば」と言ってくれましたが、周りの目が気になり、悔

生きる

第4回 同年代の人と同じ権利を

市橋 博



いち はし ひろし / 1949年生まれ。脳性マヒを抱えながら、さまざまな障害者運動にとりくむ。現在、障害者と家族の生活と権利を守る都民連絡会副会長。

めて、障害者が葛藤し、奮闘していると思います。

■権利条約を掲げよう

冒頭の言葉は「ただ、特別の手立が必要で人間だ」と続きます。障害者権利条約にも根底に流れています。私も、この言葉を思いながら、福祉制度の充実やまちづくり前進などの運動に参加してきました。

ただ、特別の必要な手立では、一人ひとり違って当然です。そこを柔軟に対応できないのが、わが国の福祉制度の欠陥の一つだと思います。年齢が達すると機械的に障害者福祉制度から介護保険制度に移行される



▶電動三輪車で街を走る

楽しく触れ合う

姿勢を変えたり、服を着たり、日常生活のさまざまな場面において、身体に触れられることが苦手な子どももいます。確かに他人に身体に触れられることは、不安や不快もあります。でも、日常生活を送るにあたり、支援が必要な子どもにとって身体に触られることを不快でなく受け止めてほしいものです。身体に触れられる感覚を、不快でなく受け止められるようになってほしいと思います。身体に触れる遊びを取り入れています。峯陽さんの作品集の中でこの歌をみつけました。

紹介されていた遊び方は、「すべりだい」と同じように、立った足踏みをします。そして、後半の「シユールルル」で立位からいっ



『すべりだい』

寺沢真弓
特別支援学校教員

きにスライディングをします。前半と後半で大きく姿勢が変わるところが、見ても楽しいし、真似っこ遊びとしても楽しめる遊びです。前半部分を、ゆっくりしたり、かけっこのように走ったり、テンポを変えてくり返し遊べます。あおむけでは、足首にしっかりと触れ、「すべりだい始めるよ」と伝えます。「すべりだい」と

期待をもつて

とんとんと「のぼる」と歌に合わせ、足首、膝、太もも、腰、おなか、胸や肩、首と段々身体の上の方を触れていきます。最後は、頭にしつかり触れ、顔を見ます。少し間をあけ顔を覗き込み、子どもの表情・様子を確認してから、一気に頭から足のほうへ「シユールルル」と全身に触れます。最後の「ララララすべろう」では、手を握ったりブラブラしたり、クルダウンします。

身体に触れると緊張していたリンちゃんには、手のひら全体で一カ所一カ所ゆっくりしつかり触れるようにしました。くり返しているうちに、最後の「シユールル」の部分の前で期待いっぱい表情を見せ、リラックスして楽しめるようになりました。頬を両手で挟み込まれるのが好きなアンちゃんは、頬に触れる前に歌を止め、顔を覗き込むと、しつかり視線を向け、動きを止めて待っています。最後は、腰をもって全身を左右に揺さぶるとより楽しそうな表情になっていました。触れられる感覚を受け止めるだけでなく、次の場面を期待したり、テンポや触れ方のちがいを感じ分け、楽しんでほしいです。(てらさわ まゆみ)



全障研のHP、『みんなのねがい』のページから動画で見ることができます。